

今月は一人の作者に優秀作を複数選ぶことが多くありました。まちりこは特に多様な視点で、感性の鋭さと共に社会性への敏感さを示してくれました。他の作者も 2 作ないし 3 作を選ぶことが多く、これは短歌の連作が物語やひとつの小宇宙を創るのに対して、独立した短詩での自己表現では、そのような多面性が欠かせないということでしょう。

嫌い嫌い

みんなあっち行って

でもひとりにはしないで

作者 加藤 美紀 愛知県

——人の心理を単刀直入に表現した、柔らかでストレートな強さ。

いるのいないの？

そう聞かれたら

そうっと上を向く

作者 桜咲 千葉県

——言葉を意味ではないもので動かすことで、意識と身体も動かすことができる。或いは身体の動きが言葉と呼ぶ。

いろいろな

ことやものたち

できるだけ

無添加でいて

色褪せてくれ

作者 風船 東京都

——自然からあらゆるものを遊離させ強化させようとする現代文明はそのことによって滅びるだろう。摂理に沿って色褪せることの正しさ。

私たち二階に行くと

子供達 一階に降りる

砂時計の家

作者 加藤 美紀 愛知県

——位置の転換が時間の転換でもある砂時計。決して交わらない家庭の構造は一面、自然ともいえる。

できるだけ ちいさく

わたしに愛を教えてください。

作者 翠 東京都

——「必要にして最小限のかたち」が愛の「最も強いかたち」かも知れない。

何をもぐどんな手首を思い出す？

世界は滅びちゃいけません

作者 ヒロミヤカザル 京都府

——もがれる手首、手、首。そして世界。

内濡れた

マスクを

振れば

国旗めく

作者 長谷川柊香 宮城県

——国民が一齐に従うことを前提としたコロナ対策は、まるで「愛  
心」を試されてでもいるかのようだ。

息子からオモチャの剣で

斬られてる

明日は早朝会議のある日

作者 まちりこ 埼玉県

——息子と遊ぶやすらぎの時間。しかし、どこかでもう明日の仕事が  
心にかかっている。オモチャでない剣で斬られるかも知れない。オモ  
チャの剣と早朝会議という対比の巧みさが光っている。

夕暮れに

連れていかれた

おじいちゃん

椅子を一脚

暗がりに置く

作者 まちりこ 埼玉県

——椅子を形代として語り掛けるしかない、どうしようもない現実がある。

かさばりますか？ ぼく

作者 風船 東京都

——「かさばる」ことへのためらい。そんなためらいが必要なのかという疑問も。

素麺は青い絵の具で描くんだよ

作者 翠 東京都

——そうだったのか、素麺は青か。なぜか深く納得。

もし骨が真っ黒だとして

それでも僕らは

海に撒くのだろうか

作者 まちりこ 埼玉県

——蒼い海に沈んでいく真っ白い骨というイメージ。いつの間にか

イメージに左右され、それをなぞる私たち。

顔文字で終わった別れ話

作者 翠 東京都

——どんな理由を付けようとも「別れたい」という一点に理由のない

真実がある以上、そもそも別れ話に顔文字は似合う(>\_<)。